

---

# 動き出した時計

ケイスケ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

動き出した時計

### 【Nコード】

N0469E

### 【作者名】

ケイスケ

### 【あらすじ】

「俺がお前を守ってやるからよ！」あれから7年後、初恋が再び動き出す。ドタバタ恋愛コメディにしていこうと思います。

## 第1話 再会

あれは、桜が咲き始めた季節のときだった。

「俺がお前を守ってやるからよ！」

初めて好きになったあなたにそう言われて

ずっとずっと一緒にいたいと思ったんだよ

。

「ふぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ、ねみいなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

俺、春日井寛は、顔も頭も普通の、至って平凡な高校生。

一応、ボクシング部のキャプテン。・・・部員俺だけなんだけどね  
(汗)

1ヶ月後に県予選が控えてるので、めっちゃ眠いけど、気合入れて  
朝から学校前にロードワークをこなしているわけだ。

「もう4月だし、追いこんでいかねえとなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

去年は、新人戦でベスト8まで行った。

まわりはやり始めて1年足らずなのによくやった！って言うてくれ

たけど、

ジムで殺人的な練習に耐えてきたから（部員いないからジムに通って練習するしかないわけ！）

自分としては悔いがめちゃうくちや残ってるわけ。（プロの先輩にもこっぴどく怒られたしさ。汗）

だから、こうして頑張ってるわけよ！

でも、ラブ&ピースとノンバイオレンスを信条としている俺にとって（自分で言うなってか？！笑）

なんでボクシングやりはじめたかは自分でもよくわかってないんだよね。

どうしてここまで俺を突き動かしているんだろうか

。

学校が始まった。

これで青春で一番盛り上がると言われる高校2年のスタートがした  
!!!!はすなんだが・・・

・・・ぶっちゃけクラスは変わってないし、担任も一緒だから緊張  
感もワクワク感もありやしな（爆）

学校では、寺井晋（野球部）と木下孝一（ウエイトリフティング部）  
とつるんでいて、

主にエロ話と筋トレ話しかしないから、女子からヘンタイ扱いで見  
られているのだが、

それなりに部活で活躍しているから、俺以外はかわいい彼女がいる  
（ふざけるなあああ！苦笑）

「お前はアウトローだからな、女はよりつかねえよ」

・・・お前らだけにはいわれたかないのだが。。。（苦笑）

入学式。

は。もう1年たったのか。早いな。

そんなおじさん思想だから彼女できないのか?!と思いつつながら、

式が終わった後にあるオリエンテーションの最後に、

各部活は代表者が必ず入学生に紹介しなければいけないので、しづしが参加。

「えーっと、ボクシング部です。部員は僕だけなんでジムに通って活動してます。ぜひ他の部活をおすすめします。よろしく。」

てな発表をしたから、話しは聞きにくる輩はいたけど、当然入部希望はなし。

まあ、俺一人でやってきてるからなんの感情も抱かなかったけど。

で、学校が終わり、晋と孝一は学校で部活があるから、

いつものように別れて、俺はそのまま学校を出て、ジムへ向かうとした。

校門を出て、よしジムまで走ってくかい！としたそのときだ。

「あの~~~~、すいませ~~~~ん。」

ちよつとか細い声が聞こえた。

「なんだ?!?!」

振り向くと、入学生らしい女の子が校門に立っていた。

黒髪のショートカットに整った顔立ち。



制服ごしでもすらつとしたボディラインがわかる彼女は、

まさに「美人」という表現がぴったりだった。

ドキッ！……としてしまった俺は、

「な、な、なんでしょうか?!?!?!」

と、動揺を隠せない浮ついた声で答えてしまった。

「あの、春日井くんだよな?!」

「へっ?!あ、あ、そうですけど。。。」

なんで彼女が俺の名前を知ってるんだ?!?!?

第一、こんな美人とこれまで話した記憶なんかないぞ?!

しかし、そう答えると、彼女ははちきれんばかりの笑顔を見せて、

「久しぶり!!!!!!!!!!」

と、いきなり抱きついてきた。

「へええええつつ?!?!?!?!?!」

突然の美少女とのご対面だけでもびっくりなのに、

いきなり抱きつかれて、

うれしいという感情もへつたくれもなく、

ただただ、?????が脳内をめぐりまくっていた。

すると、

「私のこと覚えてないの?!」

彼女はちょっと不安そうな顔を見せて、言った。

腕を抱きつかれたままなのに、

それに加えて上目づかいで俺の顔を見つめられてしまい、

さらにノックアウトしてしまった俺は、

もうクラックラになって、何を言っているかわからなくなってしまった。

すると、

「もう！鈍感なところは変わらないね！……！！」

と、ちょっと怒った顔になって、

俺の左頬をやさしくビンタした。

（音がしないくらいだったし、いつも殴られてるから痛くもへつた  
くれない）

「えっ?!?!?!」

ちよつとクラックラだった意識が戻る。

あれ?!この感触、どつかであつたような・・・。

いきなりフラッシュバックが入る。

小学生のときだ。

4年生のときから、毎日のように学校から一緒に帰っていた女の子  
がいた。

その子は、俺の話にいつも笑ってくれて、

「もう春日井くんったらー!!」

と、その話が頂点に行くと、その子は俺の左頬をやさしくビンタするのがクセだった。

「・・・ちはる?」

「うん!!!元気だった?!!」

そう。

その子は、  
。 7年前、俺が初めて恋をした松下ちはるだったのだ

## 第1話 再会（後書き）

連載スタートしました！

どっという展開になるか作者にもわかりません！  
コミカルに描いていこうと思っています！

## 第2話 変貌

あなたと出会ってから、私の生活は変わった。

毎日楽しむことができた。笑うことができた。忘れることができた。

だから離れ離れになっても、明るく頑張ってきたんだよ。

あなたといつか再会できると信じて  
。

## 第2話 変貌

「まじか……。」

突然接近してきた新入生が、



昔の初恋の相手、松下ちはるだとわかったはいいものの、

どついうりアクションをとっていいのかわからなかった。

7年ぶりということもある。

確かに当時もかわいい子であつたが、

7年経つたことで、大人っぽさのある色気を含んだ姿、

つまりはめちゃくちや変わった姿をいきなり見せ付けられたのもある。

だが一番は、当時、突然俺の前から姿を消してしまったというショックから抜け出せないままだった

のに、

7年経つて、いきなり本人が現れたということに戸惑いを感じてい

たのだ。

「もう！ずっと待ってたんだからね！」

そんな俺の感情を気にすることなく、

ちはるはめちゃくちゃ明るい声を出して、笑顔まじりに怒った感情を俺に出す。

「はぁ……。」

「もう、30分くらい待ってたんだから……！」

「はぁ……。」

「久しぶりで、びつくりした?！」

「はぁ……。」

「まったくっ！……はあはあ言っていないでなんか言つてよ！……！」

「はあ……。」

「もうっ！……！やっと会えたのに、ツレナイわね！……！」

「いいわ！今日はじゃあ入学祝になんかおごつて　それで許してあげる」

「え……ん？はあああ？！」

「そうと決まったら行きましょ！おいしそうなケーキ屋さん見つけたの！」

「そういうと、また俺の腕に抱きつき、引っ張っていく。」

「ちょっ、ちょ、待て……！俺は練習あんだけど……汗」

「いいじゃない！久しぶりに会ったのよ……！」

しかもこんな美少女が連れてって言うてるんだから、

断る男は馬鹿以外のなにものでもないわよ!?!」

・・・おいおい。。。

つかなんかキャラ変わってないか?!こんな活発的で自分勝手だったけ?!

「ほらああ!何考えてるのよ!いこっ」

戸惑いをよそに、ちはるは俺の腕をひっぱる。

「わ、わ、わかったから、腕組むのはやめれ!!--!」

「なんで?!」

「だってそらぁ・・・」

「春日井くん、彼女いるの?!」

「いや……」

「じゃあ別に気にすることないじゃない！ねっ」

「……………（汗）」

てなわけで、腕を組んだまま、半ば強制的にケーキ屋に一緒に行くことになってしまった。

しかも俺のおごりで。

……………つかちょっとまで。うわうわうわ……………。

校門でこんなやりとりしてしまったから、まわりがジロジロ見ていることに気づいた。

「げっ、おい、早く行くなら行くぞ（汗）」

「わかったあ 行こ行こ」

・・・だからなんだ、このテンションは！！！！！！

ケーキ屋に着いて、喫茶コーナーに座ると、

ちはるは、ショートケーキとモンブランとミルフィーユとアイスコ  
ーヒーを頼み、

来ると夢中でほうばっていた。

「おいおい・・・食うなあ・・・。」

「だってお腹すいたんだもん!!!」

ぶっちゃけ、これをおごると今月分のこずかいがほとんどなくなってしまうので、

参ってしまったているのだが、

嬉しそうに満面の笑顔で食べる姿を見ると、

うわっ、かわいい!!!と思ってしまい、

ついついこちらも笑顔になってしまった(笑)

「春日井くん食べないの???」

「俺は今減量中だからね。紅茶だけでいいよ。」

「ふ~~~~ん、じゃあもう1個たべちゃお!

すいませ~~~~ん!!!!シュークリーム追加でえ」

「まだ食つのおおお?！」

「だっておいしんだもん」

・・・女って恐ろしい・・・。

「あ~~~~おいしかった　ありがとう!?!?!」

店を出ると、満足そうにしているちはるは再び俺の腕に抱きついた。

「だ、だ、だからなんでまた?!?!」

「私は入学式で疲れてるの!だからエスコートするのが当たり前でしょ?！」

・・・なんのエスコートだ。





・・・だからこのテンションはなんなんだ。

まあいいや。仕方ない。というか一回帰ろう。

てなわけで、ちはるとともに住むマンションへ到着して・・・

「で、部屋どこなん?！」

「702~~~~~!」

「ふ~~~~ん・・・ななまるにいい?!?!?」

「そうよ　よろしくねっ!お・と・な・り・さ・ま」

なんか大変な予感がしてならないのですけど・・・汗汗汗

## 第2話 変貌（後書き）

続けて書いてしまいましたw

やっぱりどんな展開になるか予測がつきませんwww

リクエストとかがありましたらよろしく願いします!!!!

### 第3話 スパー

「お前に自慢できるように頑張るからよ！」

そう言っで、いつもひたむきに頑張っているあなたの姿。

ずっとずっと応援していたんだよ。  
。

### 第3話 スパー

「やべ〜〜〜、遅刻だわあああああ」

俺は、全力で走ってジムに向かっていた。

「まったく、どっちもこっちもえらいこっちゃだわ。」

入学式で、早く学校が終わって、余裕を持ってジムに行く予定が、

ちはるとの突然との再会、

そんなでもってケーキ屋に連行される(？)という目まぐるしい展開になってしまい、

約束の時間にぎりぎりになってしまったのだ。

今日は、ちょうど県予選が1ヶ月前ということもあり、

(プラス俺の実力が認められたどうかは知らないが、)

会長が、ジム期待のホープの遠山司先輩とのスパーを約束をした日だったのだ。

遠山先輩は、俺よりも一つ下の階級のスーパーフェザー級で、プロ5戦3勝2KO。

東日本新人王トーナメントでも準決勝までに行った人だ。

その準決勝でも、バッティングでまぶたに出血さえしなければ、勝っていた内容だった。

そんな人とスパーさせてもらえるものだから、楽しみで仕方なかったのに！！！！

「ふう〜〜〜〜、間に合った！！！！おはようございま〜〜す！！！」

「う〜す！」

「おはよ〜！」

「どうしんだ？！ギリギリだったな。」

周りのジムメイト（だいたいが練習生）が声をかける。

つか今日は、わりかし人が多い。

「いや、ちょっといろいろありまして。。。」

急いなので、汗びっしょりでいつものロードワークよりぐったりきってしまった。

しかし、すると、会長が寄ってきて、

「うし。それだけ汗かいていれば、アップ軽くやってすぐスパーだな。準備してき！」

・・・あいや~~~~汗

いろいろやって30分後、俺はリングの上にいた。

さあ！どこまで自分の力が通用するのか！！！！

会長には「戦法はない。とにかくありったけをぶつかってみろ。」

先輩には「手加減しないからな。」

と言われ、ゴングがなった。

ちなみに、俺のスタイルはファイター型のサウスポー。

全くの不器用でテクニクを要求されるのは酷だが、

接近戦ではそれなりの自信がある。

一方の遠山先輩は、オーソドックスのボクサーファイター。

そして俺とは逆にスピードがめちゃくちゃあって、テクニシャン。

玄人からも『うまいっ！』と言われるボクシングに定評がある。

とにかく、突っ込んで手数を出しまくる！



しよっぱなから積極的に前に出た。

しかし。。。

左右への動きがめちゃくちゃ早い。

パンチへの対応が尋常じゃない。

軽く打ったように見えるジャブが痛烈に効く。

・・・やばい。このままでは何もできないまま倒される。

中途半端な距離を詰めて、とにかく自分の勝ちパターンで行くんだ！

被弾されまくったが、なんとか前に進む。

そして、右をかいくぐって、懐に入るところまで行けた。

よっしゃあ！……！と思った瞬間……

先輩のサンデーパンチの右フックが俺の顔をクリーンヒット。

強烈に吹き飛んだ……。。

なんとか、なんとか立ち上がったものの、あとは棒戦一方……。。

予定の3ラウンド、まるでサンドバックのように打たれまくった。

……

ぐわああああ。参ったなあ。。。。

俺は全身の痛みを引きずりながら帰路に向かっていた。

「うむ。まあこうなることは目に見えてたよ。いい経験になっただろ。」

「会長、でもわりかし良いガッツしてましたよ。早くプロ受けさしたほうがいいかもっすよ。」

めためたにやられたのに、会長と先輩に意外にも良い事を言われて嬉しかったはいいものの、

完全に身体が思わないように動かない。。。。

なんとか這い蹲るように家に着いた。

「ただいま。」

「あ、お帰り。なぐに、またこっぴどくやられたわねえ。」

せつかわい女の子来てるっていうのにねえ。」

と、母さんが不敵な笑みで迎えた。

そして・・・

「お帰り！！！！春日井くん！！！！！！」

なんで、ちはるが俺んちに来てるんだよ！！！！！！

### 第3話 スパー（後書き）

今回は、ちょっと寛のボクシングネタにしました。

ちはるとのからは次回以降お楽しみに！！！！

## 第4話 目覚め

さびしいって気持ちはなかった。

苦しいって気持ちもなかった。

だってそれはあなたに会えるとずっと信じていたから。  
。

## 第4話 目覚め

・  
・  
・  
・  
・  
・  
。

さっきまでの痛みが嘘のように消えてしまっ

ぽかんとしていた俺に対して、おかんがまくし立てる。

「あんた、よかったわねー!!!」

話しはちはるちゃんからいろいろ聞いたわよー!

これから楽しいわねえ。」

「えへへ」

.....。

どうやら、おかんはちはるのことを覚えていて、

(ちなみに俺は昔ちはるのことをずーーーーっとおかんに話していた)

俺がジムへ行ってる間、ちはるは俺んちを訪ねて、  
おかんとべらべらと話していたらしい。。。。

それが推測できると、再びさっきの疲れがドカッときて、

「悪い、寝るわ。」

と言って、自分の部屋に入ってベッドにダウンした。

さすがに思考能力がまったくなく、

申し訳ないと思いましたが、

それよりも身体のシグナルが休めというサインを送っていて、

俺はすぐに意識がなくなった。



朝。

携帯の目覚ましアラームになる。

猛烈な痛みが身体を襲ったままだが、

当然学校へ行かなきゃならないので、なんとか身体を動かそうとする。

「うがああああ!!!!起きるか!!!!」

背伸びをすると、となりになんかがいることに気づいた。

「んんっ?!?!」

ふとんの中になにかがいる・・・。

「ぐわあああ!?!?!?!」

痛みも眠気も吹きとんで、めっちゃめっちゃでかい悲鳴をあげてしまった俺に対して、

「それ」は、むくむくっと起き出した。

そう、ちはるだったのだ!!!!!!

「お、お、おまえ、なんで俺んとこで寝てんだ?!?!?!」

「ん~~~~、寝た~~~~。」

「はiiiiiiiiい?!?!」

もう訳がわからなくなって、脳みそパンク状態になった俺は、

部屋を出て、朝めしを作っているおかんのところへ行った。

「あ、おはよ」

「おはようじゃねえよ……なんだよ、あ、あれは……!」

「ああ。ちはるちゃんね。

彼女の親御さん、いつも忙しくて、家を空けてるんですって。

だからさびしいだろうから泊めたあげたのよ。」

「ん、ん、んな、にしても、俺ん部屋に泊めることなからうだべよ……!」

東京生まれ東京育ちの俺であるが、

このときばかりは発言の方言がわけわかっていない。

「いいじゃない。彼女があんたんとこで寝たいって言ったんだから。あんなかわいい子で、なおかつあんたの初恋の子なら言うことないじゃないのよ……」

もうなんとも言えない感情になっている俺をよそに、

しゃっきつとしたちはるがやってきた。

「はあ、よく寝た！ほら春日井くん！着替えてきなよ！」

そして勝手に朝めしを食べるちはる。

あたしはどつすねばいいんでうか！……！！

#### 第4話 目覚め（後書き）

お待たせしました。二人のからみです（笑）

でも、まだこの二人の会話らしい会話がないんですよ〜。

そろそろかな？！（笑）

## 第5話 誘導尋問

私はいろんなことがあって、境遇がまるっきり変わってしまった。

だから笑うことなんてできなくなってたのに。。。。

でも、あなたは昔と全然かわってなかったね。  
。

## 第5話 誘導尋問

結局、口の中が切れまくっていたので、

ロクに朝めしを食えなかった俺は不機嫌だった。

だが、不機嫌なのはそれだけが原因ではない。

朝めしの場での話だ。

「あんたさあ、ちはるちゃんいろいろ大変だと思うから、家に呼ぶようにしていいかい?！」

うちのおかんが言う。

うむ。確かに親がめったに帰ってこなくて、かつお隣。そんでもって俺とちはるは昔の間柄もある。

だからその行為はよくわかる。



しかし・・・

話しを進めていくと・・・

登下校がいつも一緒。めしも一緒。

そんなもって極めつけは、昨日のように俺の部屋で泊まるんだと！  
！！汗

そらね、客観的に見ればものすごくいいことですよ？！

初恋の子と再会して、しかも同居に似たシチュエーションになるわけですから。

だけでもねえ・・・

俺は基本的にマイペースで生きたい人。

しかも1ヶ月後は試合が控えている。

それでもって、ちはると再会してからろくに会話もすることまでできず、

ただただ振り回されてる感、満載・・・・・・・・。。

「ありがとう！……春日井くん！……！」

そうちはるにとびきりの笑顔で言われてしまったのは、

断るなんて無理な話ではあるのだが……

う……………ん。。。。。。

そんな感じだから俺は不機嫌だった。

朝の登校も、向こうのペースに載せられまくって、

俺から話しを持ちかけることができなかったし。

いろいろ話しがしたいんに。

なのであの時、俺の前からいきなり姿を消したのか。

なんで今になって俺の前に戻ってきたのか。（偶然だったのか？必然だったのか？）

離れてから7年間何があったのか。

こんなに明るく接するのはどうしてか。

そして、俺のことをホントはどう思っていて、今はどうなのか。

などなど。。。。

再会できたことは嬉しかったが、いかんせん段階が急すぎるんだよ。

は~~~~~~~~。

そう思っていた昼休み、当然のごとく晋と孝一はちゃかしにかかる。

「やいやい！誰なんだよ！朝の彼女はよ！！！」

「ついにお前も女ができたか~~~~~！ちきしょ~！あんなかわいい子~~~~ずり~~~~」

・ ・ ・  
へいへい。わかりましたよ。

つかお前らは俺のこのぼろぼろの姿を心配しろってんだ！

そんなかなだつたが、まあてきとーに流して（今日はそういう気分だった）

昼めしの弁当を食おうとしたら、

「な、に、私をほっといてご飯食べようとしてるの……?」

げ  
げ  
げ。  
。  
。  
。

ちはるが俺の教室にやってきやがった!!!!!!

「ほらぁー!」ご飯食べにいこっ」

有無を言わず、俺は引っ張られ、屋上へ連れて行かれてしまった。  
。。。

そのとき、やつらがヒューヒュー!!!とあおっていたのは言うまでもない。。。汗

「お前さぁ。もうちょっと落ち着いていかないか?」

卵焼きをほつりこみながら、やっと俺からしゃべりだす。

「ええっ?!どうしてえゝ?!」

「だってお前、昔はそんなエネルギーじゃなかったべ？」

どうしたんだい、いったい？」

「そんなことないよ~~~~」

えっ・・・もしかして今の私嫌い・・・？」

いきなり、泣きそうな顔を見せる。

「おいおいおいおいおい・・・そんなことない！そんなことない！！！」

「そうだよ、7年もたってるもんね。。。」「

いきなり、しんみりした空気になる。

「だから違っって言ってるだべよ！！！！！」

懸命になだめる俺。

「・・・ホント?!」

「ホントホント。」

「私のこと、好き？」

「うん、好き好き。・・・んがっ?!?!?!?!?」

げっ。。。誘導尋問にひっかかった。。。orz

「やった　うれしいっ」

・・・もう好きにしてください。。。汗



## 第5話 誘導尋問（後書き）

ランキングが落ちてきましたた~~~~汗  
ぜひご投票を~~~~!!!!

## 第6話 変化

新年度が始まってからもうすぐ1ヶ月が経とうとしている。

その間で、ずいぶん俺の境遇が変わってしまった。

そう、ちはるの入学で、だ。

まず、学校名物の入学生歓迎スポーツ大会。

今年はバレーボール大会だった。

そこでのちはるの活躍がものすごかった。

抜群のプロモーションに、

はちきれんばかりのとびきりの笑顔。

そして準優勝チームのエースだったということもあって、

たちまち学校で、話題の入学生ということで注目になり、

学級新聞のトップを飾ってしまった。

次に、ヤツがテニス部に入部したこと。

うちの学校はなかなか強く、

3年生でインハイでベスト8に入った中山先輩を中心に、

全国でも良い勝負になっているのだ。

で、そこに飛び込んだちはる。

入学生歓迎スポーツ大会で、一躍有名になったことで、

野郎どもにちやほやされたことは言うまでもないが、

いかんせん中山先輩以下たくさんの女性陣に目を付けられてしまった。

そして、入部初日で、いきなり入部試験と題されて、

中山先輩と試合をすることになってしまったのだ……！！

ところがどっこい。

ブーイングと憐れみが錯綜する中で、

ちはるは負けはしたものの、

なんと1セットマッチで6 - 4という好勝負を演じてみせたのだ！  
！！

そんなもんだから、男どもの間ではファンクラブができてしまい、

女の子の間でも性格がいいもんだからモテモテになって、

（まあ一部では嫉妬の嵐も激しいみたいだが・・・笑）

学校の中ではちはるフィーバーが起きてしまったのだ！！！！

そんなもんだから、俺が大変なことになるのは当然のお話。

まず登下校が一緒。

これで周りからの俺に対する殺意がものすごいことになった。

そんでもって、昼めしも拉致られて屋上で一緒に食ってるから、

その時もストーカーのごとく屋上で待ち構えている野郎を感じながらだから

、味もへったくれもない。

おかげで学校にホントに居辛くなってしまったい。

だがそんな境遇で、やっぱり心配なので、

いつもが学校が終わったら即ジムへ向かっていたのだが、

ちはるの部活が終わるのを待って、一緒に帰るようにした。

そして、俺はその間、学校のまわりをランニングするようになった。

まあスタミナ強化のためと思えば、悪くないからいいけどね。

俺は、あと1週間で県予選が控えている。

しかしそんな時、事件は起きた

。

## 第6話 変化（後書き）

今回は前起き部分で、ちょっと期待はずれだったでしょうか？w

次回への伏線ですので、ご期待をw

あ、投票みなさまありがとうございます！！励みになります！  
引き続きよろしくおねがいします。



## 第7話 ハプニング

今日も授業のあと、ちはるは部活へ、俺はランニングへ、

ほんでもって5時に校門で待ち合わせの約束をしていた。

で、ランニングが終わり、先に校門について待っていた。

ところが・・・

・・・こない・・・。

10分、20分・・・。

何してんだ・・・。

仕方ないので、携帯を取り出し、

電話をかけてみても、出ない・・・。

おいおいおいおい・・・。

あれだけの美人だ。

当然、なんかあったんじゃないか心配になる。

そして、俺は、学校内に戻る。

まず、テニスコート。いない。部員ですらもっていない。

教室。いない。当然だ。

あとは・・・屋上か・・・

めんどくせ～～～な～～～と思いつながら屋上に向かう。

はあ～～。疲れた。まあいねえだろ。

と思っていたら・・・

・・・げげげげっ!!!!!!!!!!!!!!

スケバン集団（今さら死語かもしれないが俺の学校には存在している）と、

ヤンキー風の兄ちゃん3人に囲まれてるでねえか！！！！

「あんたさあ、目障りなんだよねえ。」

「なあなあ、ここに来たって言うことはわかってんだろ？！」

そして、スケバン集団がちはるに襲い掛かる。

兄ちゃん3人の目も逝っちゃっている。。。

これはリアルにまずい。

「おい！なにやってんだよ！……！……！」

俺が大声で駆け寄る。

「あ……ら、彼氏くんじゃな……い。」

遅かったじゃないの……。

番長らしき、女子が振り返り言う。

「白馬の王子様のご出現ですかあ？かつこいいわねえ」

「そんなんでもいいが、やめんかい！」

「な……に言ってるのよ？そんなですぐやめると思っ……」

それにちよつとこの子を教育するだけなのよ？

あんたは黙ってみてなさい。」

「ふざけるな！ただの暴力じゃねえか！」

とりあえず、揉みくちゃになっているのは振りほどくことはできた。

だが・・・

逃げようにも逃げられない。

男女合わせて8人か。

粹がっているが、全員シロウトのようなもの。

正直、相手にならない。

だが、拳を使ってしまったら、1週間後の県予選に出れなくな

ってしまっ。

・・・どうする？

「ナッロウ！！！」

1人の兄ちゃんが殴りにかかる。

ひょいっと避ける。動きがトロイな~~~~。

「やめとこっよ？！ねえ？」

「な、な、なめやがってえ！！！」

驚きと憎悪が織り交じった顔をして、

今度は3人が同時に襲いかかってくる。

これまたするっと避けるものの、これ以上避けていたら、

ちはるの元を離れてしまい、残りのスケバン集団5人がちはるをどうするかわからない。

くそくそくそ・・・ラチがあかねえ。。。。

どうする?!どうする?!?!

迷っていると、またもや3人が突進してきた。

・・・仕方ない。

俺は避けていたのをシフトチェンジし、

試合のときと同じように、兄ちゃんたちの懷に飛び込み、

ボディに一発ずつぼつりこんだ。

「がはああああ!!!!!!」

兄ちゃんたちは、床にもがき倒れた。



「だからやめようって言ったのに。どっつ？もつやめない？！」

スケバンたちに問いかける。

絶句したスケバンたちは

「つつつ！！！覚えてなさいよ！！！！」

と言って、そそくさと逃げていった。

・・・あの~~~~兄ちゃんたち置いていくんかい・・・

まあいいや、ほっとけ。とりあえず帰るべ。

「ほれ！とつとと行くぞ！」

その一部始終を見ていたちはるは呆然としていたが、

俺の言葉で、我を取り戻し、申し訳なさそうに俺の後ろをついていった。

「ったく、何やってるんだよ!!!!!!」

当然、俺は不機嫌だ。

「だってだって……」

ちはるは泣き顔になっている。

「俺が見つけれなかったらリアルにやばかったぞ!!!!!!」

ちはるは、ついに泣き出してしまった。

・・・俺はちはるの涙にはホントに弱い。

小学生のときも、それについつい飲まれてしまい、

ちはるが悪かったとしても、すべて俺からあやまってしまう。

「あ~~~~もうつ!~!!~!

わかったわかった!~!!

俺が守ったんだから良いってことだな!~!!以後気をつけるよ  
うに!~!!~!

「・・・ありがとう。。。」

すると、ちはるは、俺の背中に抱きついてきた。

「・・・やっぱりあなたは昔と変わってないね。」

……ぐええええ。

さっきまでの怒りが消えて、顔が真っ赤になってしまったい。

家に帰って、詳細を聞くと、

俺から屋上に来てと伝言であって、

言ってみるとそういうことになっていたらしい。

とりあえず、再度俺とおかんからお灸を据えて（おかんは俺も責めていたが……）

以後、なんかあるときは携帯で連絡を取り合うということに結論づいた。

まあなんか結果としては良いハプニングだったかな〜と、

思っていた。

しかし翌日。

俺は、職員室に呼び出され、県予選出場停止の処分が下された。

## 第7話 ハプニング（後書き）

ふ~~~~。勉強が終わってないのに書いてしまいました・・・。

この後、どういつ展開になっていくのかお楽しみに!!!

## 第8話 処分

「全く、お前は何やってるんだ?!?!」

担任の安西にどやされる。

「すみません。」

実はこの先生とは折り合いが悪い。

何かというと、すぐに俺に目をつけて、

弁解の余地も与えずにグダグダ説教となにかしらの制裁を加えてくる。

しかし、反論しても無駄なので、ハイハイ言って最小限におさめている。

「お前だったらこんなことするとは思っていたけどさあ」

・・・それはどういうことだ？

くそ、教師でなければ、こんなクソ人間ぶん殴ってやるんに・

・・。

・・・我慢だ我慢・・・

「すみません。」

「お前がケンカ売られたんだよね？」

なんですぐに先生に言わなかった？！」

「すみません。」

「すみませんじゃわかんねんだよ！答えろこの野郎！！！」

・・・この野郎？！俺は仮にもお前の教え子だぞ？！

周りの先生たちもちよっと同情の目を俺に向けるが、



いかんせん問題を起こしたくないから、知らん振りをしている

。

「申し訳ありませんでした。」

「んの野郎！！わかってるんだろっな？！」

一応、最悪な展開になるのは予想していた。

「お前みたいな暴力生徒はこの学校にはいらん！！！！！！

しかし、退学にすると俺にとばっちりがくるからな。

とりあえず、1週間の謹慎な。そして大会もなしだ。」

・・・くそっつ。俺は何も悪いことしてないのに。

これが教育現場の実態かよ・・・ありえねえ。

しかし、これ以上、職員室にしているとホントにぶん殴りそうなの

で、

「……わかりました。申し訳ありませんでした。失礼します。」

「……おい、まだ話は……」

と言っのをさえぎって、俺は職員室を出た。

思いっきりドアをたたきつけるように閉めたのは、せめてもの

反抗だった。

すると、教頭が俺に近づいてきた。

「春日井くん、ちょっと待って。」

安西とは対照的に教頭とは仲がよい。

ボクシングに対する理解がものすごいあるのだ。

「安西くんに対して怒るのもわかる。君は被害者なのもわかる

」。

「じゃあ、なんでそこまで言われなきゃいけないんですか！」

俺はさすがに怒っていた。

「・・・それが学校っていうもんだ。耐えてくれ・・・」

「つつ。とりあえず俺は1週間休みますから」

「・・・申し訳ない。どうか公にはしないから。」

「・・・公に?!そこまで俺は悪いことしてねえ!

なんだかんだでやつぱし腐ってるわ、この学校は・・・

しゃべる気も失せたので、俺はとつとつ、学校を出てった。

「いろいろあったから、先帰ることになった。

それから1週間学校休むから。よろしく。」

というメールをちはるに打って、俺はジムに向かった。

そして、会長に今回の旨を全部洗いざらい話した。

「うむう……やってしまったか……。」

「すみません、ああするしかなかったので……。」

「そっくだいなあ・・・。」

自分のことならいざ知らず、女がらみじゃなあ・・・。」

「いやいやいや・・・そんなん関係なくですよ・・・汗」

「わかつとるわ。」

俺も学生るとき、そんなに何回も出くわして、

何人もぶっ放してるわ。

まあ俺のときは気絶させて記憶なくさせたから、

問題にはならなかったがな。」

・・・こわっ・・・。。。

「しかしな～～。今のままなら県予選は楽勝だったんに・・・

」

「・・・くやしいうす。」

「で、お前どうしたんだ?!」

「とりあえず、目標がなくなったし、1週間休まなきゃいけない

いし、

ちょっとジムも休もうと思います。。。」

一気にモチベーションが下がっているじゃそう考えるのも仕方

ない。

「そうか……。」

会長は何かを考えている。

「しかし、これからまたこういう問題は増えていくな……」

「はぁ……。」

そして、少し沈黙が流れてから、

会長は驚くべき発言をかけた。

「お前、プロになる気はないか？」

「・・・へっ?!?!?!?」

鳩が豆鉄砲くらったような顔になる。

「いやな、こないだの遠山とのスパーでよ、

あいつとも話したんだが、お前はアマよりもプロ向きと思ってよ。

正直、素質なら遠山よりも上だと俺は感じている。

どうだ? いいきっかけのような気がするのだが。」

「・・・・・・・・・・。」

いきなりそんなこと言われて、呆然としてしまった。

「お前にはそんなこと言ってなかったからな。」

まあ今はこんなことがあったんだからゆっくり休め。

で、決意が固まったら、また来い。」

「……わかりました。」

帰り道、俺は相変わらずぼーっとしていた。

学校謹慎、県予選ダメ、プロ転向の薦め……。

俺はどうしたらいいんだろうか。



川沿いの原っぱで、俺は寝そべりながら、

ただただ、空を見上げていた。

## 第8話 処分（後書き）

とりあえず自分の中では一区切りつけました！

これから、ちはる視点で書くか、もっと話をすすめていくか迷っています！

リクエストあったらぜひお願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0469e/>

---

動き出した時計

2010年10月10日03時09分発行